「日本人らしさ」から見るサッカー日本代表の変遷

2015 年 12 月 31 日
法学部政治学科 4 年 G 組
31259451 仁保　麗

目次

1　はじめに
　1.1　問題の背景
　1.2　本論の流れ
2　先行研究①—『「日本文化論」の変容』、論者たちと時代
　2.1　『菊と刀』ールース・ベネディクト
　2.2　「否定特殊性の認識」(1945～1955)
　2.3　「歴史的相対性の認識」(1956～1963)
　2.4　「肯定的特殊性の認識」(1964～1983)
　2.5　「特殊から普遍へ」(1984～1990 年頃)
　2.6　「国際化」の中の「日本文化論」(1989 年、1990 年以降)
　2.7　「おわりに」—いま求められること
3　先行研究②—『問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに』
4　小結論
5　サッカー日本代表の変遷—「日本人らしさ」の視点から
　5.1　『勝利のチームマネジメント』から見る日本代表監督によるチームの創り方
　5.2　ハンス・オフト(1992.5-1993.10)
　5.3　加茂周(1995.1-1997.10)
　5.4　岡田武史(1997.10-1998.6)
　5.5　フィリップ・トルシエ(1998.10-2002.6)
　5.6　ジーコ(2002.7-2006.6)
　5.7　イビチャ・オシム(2006.8-2007.11)
　5.8　岡田武史(2008.1-2010.6)
　5.9　アルベルト・ザッケローニ(2010.10-2014.6)
6　結論

1　はじめに

初めて生まれ故郷を離れ外の世界に触れるという経験は、人の生き方に大きな影響を与える。そして、自分のルーツを振り返るきっかけを与える。「自分」とは、一体どのような人間なのか。一度は誰しもが頭の中で抱く問いではないだろうか。更にルーツを振り返る上で、日本人としての自分に向き合う時、次の問いにたどり着く。「日本人らしさ」とは何か。

私が「日本人らしさ」について考え始めるようになったきっかけは、自らの海外生活にあったと振り返る。私は小学 5 年生から中学 3 年生までの約四年間、父親の仕事の都合で韓国に移住し、そこで様々な国からの学生が集うインターナショナルスクールに通った。私にとっては初めての海外生活で、当然のことであるが、通う中で大小様々な問題に直面した。会話の中での表情やボディーランゲージの重要性、更に個々人の強い意思に基づく言動には特に驚き戸惑った。例えば、日本には、授業中に意見を問われても話そうとせず、「わからない」と、注目から逃れようとしたりするいわゆるおとなしい子やシャイな子が必ずクラス内にはいるもの。しかし、インターナショナルスクールでは、一見静かそうに見える子でも意見を問われることがあれば、そのときは必ず内に持つしっかりとした考えや思いを明確に伝える。まるで、間違うことよりも意見を持っていないことの方が良くないことであると幼い頃から習い育ってきた様だった。これに対して、日本には”空気を読む”や”出る杭は打たれる”という表現が存在するように、協調性を重んじる日本の文化の中で育ってきた私は、不慣れな環境に居心地の悪さを感じ、とても苦労したことを鮮明に覚えている。そしてこの感覚は、日本人である私のみが感じているように思えた。果たしてこれは国民性なのだろうか。私個人の性格の問題であろうか。しかし、日本とその他幾つもの国々との間になんらかの壁があるように感じたのである。

こうして、通い始めて間もない頃から、日本人とはどのような人種なのか、「日本人らしさ」とは一体何か、という疑問が生まれた。もし「日本人らしさ」が実際に存在するのだとすれば、グローバル化・多文化化が進むことで国境による隔たりが失われ、世界の在り方が目まぐるしく変容する流動的な時代において、「日本人らしさ」はどう変化していくのであろうか。また、「日本人らしさ」は失われていくこともあるのではないか、と感じたこともあり、自らのアイデンティティの一部とも成り得る「日本人らしさ」を今一度見つめることの重要性を感じた。青木も、海外に居住する日本人が圧倒的に増えた現代において、彼らが「日本人であることは何か」を説明でき、日本人が日本人であることの根拠とするものや、「アイデンティティ」の拠り所を追求する必要がある[1]と考えている。

ここで、アイデンティティの定義について考える。

岩崎によると、「人はさまざまなアイデンティティを抱えて生きている。すなわち、自分自身であることから始まり、家族、学校、会社、宗教・宗派、サークルや同好会など、そして民族や国民の一員であることについて、自覚し、主張し、誇りを持ち、生きがいを感じ、あるいは帰属意識を持つのである[2]。」ここからわかることは、「自分は何者なのか[3]」という問いをどういった状況で自分に投げかけるかで 2

---

[1] 青木保『「日本文化論」の変容　戦後日本の文化とアイデンティティー』（中央公論新社、2005 年）47 ページ

[2] 岩崎久美子『在外日本人のナショナル・アイデンティティ―国際化社会における「個とは何か―」』（明石書店、2007 年）14 ページ

[3] 同上、19 ページ

つに分類することができるということだ。1 つは、自分自身と向き合って問う自己同一性と呼ばれるものだ[4]。2 つ目は、自分と他人とを比較し、集団のなかでの自分の存在を問う帰属意識と呼ばれるものである[5]。

1.1　問題の背景

「日本人らしさ」、「日本人性」、「日本文化論」の正体とは一体何なのか。
その背景には、前提として文化本主義がある。それは馬渕によると、「各々の文化は、その文化を表す純正な要素をもっており、他の文化との間に何らかの明確な境界をもっていると捉える文化観[6]」を意味する。

以下では、俗に「日本人らしさ」と信じられている、「日本人性」の幻想[7]についての議論を紹介する。まず、山岸によると、「「日本人らしさ」とは、生き抜くための戦略[8]」で、「日本人とアメリカ人の行動パターンの違いは、文化の違いがもたらしたものというよりも、その人が置かれている「環境」、つまり社会のあり方がもたらしたものにすぎない[9]」と述べ、「日本人文化論」を否定する。つまりどういうことか、「日本人は家族よりも会社を大切にする会社人間である」という表現を一例に用いて考えてみる。「日本人＝会社人間」といったような表現には、多くのメディア媒体を通して触れる機会が比較的に多い。「和の文化」には滅私奉公の精神があるとされ、それは「お国のため」と老若男女問わず、命を捧げたという戦時中からも分かるものであり、「日本人らしさ」の典型と考えられてきた。しかし、戦国時代は実は実力主義であったことや、会社の業績が落ち込んだ時に自分の生活を脅かしてまで会社を守ろうとする人がいないことが、山岸の否定の根拠となっている。事実、終身雇用制や年功序列制近年崩壊し、日本における会社での雇用状況は大きく変わってきているといえる。では、「会社人間」=「日本人らしさ」と信じられてきた理由はどこにあるのか。それは、「日本のサラリーマンが会社に忠誠心を示すのは、そうやってふるまうことが日本の社会において最も適応した行動であるからに他ならない[10]」からである、と山岸は考える。戦後長い間続いてきた終身雇用制度の下で、出世するためには、実力をアピールすることよりも、会社への忠誠というアピールが重要であったからである。心の拠り所として、会社を求めているわけでも、会社が家族よりも大切なわけでもないというわけだ。

次に、私が海外生活をしていた頃も、身をもって感じた例でもある「自己卑下の文化、謙譲の美徳」の例に関しても考えてみる。自分の成果により、物事がうまくいったことで他人に褒められる際に、多くの日本人は「それ程でも。」や「そんなことないです。」といった風に謙遜をする。それに対して、インターナショナルスクールに通っていた時には、「Thanks.」と、言われたことに対しての、素直な感謝の気持ちを表現する反応を示すことが自然にあった。
果たして、この差は日本人とそうでない人であるから故に生まれるものなのだろうか。山岸は、これに

---

[4] 同上、19 ページ
[5] 同上、15 ページ
[6] 馬渕仁『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』（京都大学学術出版会、2002 年）55 ページ
[7] 宮本翔太「「日本文化論」からの脱却—マスメディア分析を通して」慶應義塾大学塩原良和研究会卒業論文（2010 年、3 ページ）
[8] 山岸俊男『日本の「安心」はなぜ消えたのか』（集英社インターナショナル、2008 年）50 ページ
[9] 同上、50 ページ
[10] 同上、49 ページ

対しても、日本人独特の精神からくるものではないと考える。この場合も同様、日本人が自己卑下をするのは、そのような態度を取ることによって得られる利益が多いからであり、後天的な何らかの習慣からくる「ホンネ」と「タテマエ」の戦略的な使い分けによるものだと山岸は述べる。彼は、これを「デフォルト戦略」と呼ぶこととしている[11]。これらは一例ではあるが、「会社人間」、「自己卑下」などを、あくまで環境に合わせるための合理的な選択だとし、「日本人らしさ」からくるものではないとする主張がある。

一方で、日本に在住する 1 億 2000 万人以上の日本人のほぼ 100%は日本語という一言語のみを母語としていて、しかも他民族と同一言語を共有しない例は地球上にほとんど存在しないとしたうえで、「言語のみならず、経済的・文化的・社会的にもきわめて同質性が高いが、このことは日本人の大多数が国民的・民族的アイデンティティを共有してきたということを意味し、また、そうであるがゆえに道徳観や価値観なども国民の間で共通するものが多い[12]」ことから、日本人が共有する日本人としての同一性は他国と比べて高いということができるのかもしれない。だが、こうしたデータがあることが「日本人らしさ」の根拠とはならないことも忘れてはいけない。

1.2　本論の流れ

本論文は 2 段階構成になっている。まず、「日本文化論」の学問的分析を行う。「日本文化論」の変容に大きく影響したと考えられる、戦後(1945 年以降)を分析対象とし、いまの日本社会で「日本人らしさ」とされるものは何時どのようにして形成されたのかを見た後、現「日本文化論」の在り方について議論をする。次章で紹介する青木保による「日本文化論」とは、「戦後における日本人の「アイデンティティ」の対象としての「日本文化」というとき、それを包括的に一つの全体としてとらえ、外国・異文化との比較において、論じてきた[13]」ものである。この書物を参考に、「日本文化論」がどのようにして変容してきたのか、という全体的な流れを確認し、その後アメリカ合衆国を拠点に、90 年代に盛んに展開された「白人性研究(whiteness studies)」を手掛かりにしながら分析を進めた。

ところで、文化の定義は数多く存在するが、文化人類学者である祖父江孝男は、アメリカの人類学者クラックホーンと心理学者のケリーの 2 人によって 1945 年に作られた次のような定義を紹介している。「文化とは後天的・歴史的に形成された、外面的および内面的な生活様式の体系であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものである[14]」。

次に、サッカー日本代表、所謂サムライブルーにおける「日本人らしさ」の影響について分析していきたい。今でこそ、海外で活躍する日本人選手が増え、日本サッカーの成長が著しいと言われる時代になったが、華々しいナショナルスポーツという現在の形に至るまでに長い時を要した。日本のサッカーの歴史は 1900 年代頭に遡る。1919 年に、現在でいう日本サッカー協会(JFA)が設立され、1929 年に国際サッカー連盟(FIFA)で加盟が承認されたことを考えると、1871 年にアメリカ人により伝来された野球と比較しても、日本における大きな歴史の差はないと言っても過言では無い。その後戦争の混

---

[11] 青木保、前掲書、56 ページ
[12] 相良憲昭、前掲書（岩崎久美子編、明石書店、2007 年）16 ページ
[13] 青木保、前掲書、23 ページ
[14] 祖父江孝男『文化人類学入門』（中央公論新社、2006 年）40 ページ

乱を乗り越え、国際舞台に政治界よりもいち早く国際社会に復帰した日本サッカー界であったが、国際舞台での結果を残すことができたのは、1968 年のメキシコオリンピックが最初である。また、FIFA により開催される、ワールドカップが開始したのが 1930 年であるに対し、日本の初出場が 1998 年とサッカーの歴史を長く持つ欧州、南米諸国に比べ大きく後れを取った。このような歴史の上に、その後、所謂スター選手が増えたこと、世界に名の通った名監督による指導、ナショナルチームとしての経験を積み重ね、徐々に結果を伸ばすようになっていったのである。その間、無論、サッカー選手も一般国民同様、「日本人らしさ」の変容の過程を生きてきた。よって、「日本文化論」で語られる「日本人らしさ」が、日本サッカーに与える影響について分析する。「日本文化論」の分析と同様、戦後(1945 年以降)を分析対象とし、日本代表のシステム論がどう変化を遂げてきたか、順を追って見ていく。チームのシステムを構成する人間によりチームが左右され、結果が左右される。どのような計画やアイデアの元、その時代の日本代表として作り上げられていったのかを分析していく。

また、「日本人らしさ」を分析していく過程で、自分の意識の根底に無意識的に存在する「日本人性への幻想」を取り払い、あくまで、様々な「～らしさ」があるうちの分析対象の一つとして客観的に研究を進めることを心がけた。文化や”らしさ”というものは、国などの大規模なものから人個人単位の小規模なものまで、幅広く存在し、それらは人々が年を重ねたり、環境が変わったりする中で自由に選択される。他の文化や”らしさ”を持つ者に、自らのそれを強いるべきではないし、異なる種のそれに出会った際に迫害してはならない。むしろ、自分と他人の持つ文化や互いの”らしさ”が異なることの方が自然であることを理解し、それらを許容し、共に共存させることが現在のグローバル社会では求められるのではないかと私は考える。異なる 2 つから共通点を見つけ出すのもありだろう。グローバル化に伴い、「人はもはや自己の「地域」文化の担い手のみならず、異なる文化や新しい文化の運び手であり、導き手でもある[15]」通り、国単位で物事を判断するには難しい時代になったといえる。

2　先行研究①—『「日本文化論」の変容』、論者たちと時代

青木保の『「日本文化論」の変容』をベースに、戦後における「日本文化論」の背景について分析した。「日本文化論」を日本社会に根付かせる大きなきっかけとなったのが、ルース・ベネディクトによる『菊と刀』であり、以下順に、それ以降の年代を時期別に区分し、まとめている。

2.1　『菊と刀』－ルース・ベネディクト

1946 年に原著が出版、1948 年に翻訳が出版され、「日本文化論」という概念が、初めて日本に定着することとなったきっかけとなった。文化人類学者である筆者によって本著は手掛けられたのであるが、文化人類学の研究としては異例であるとされている。理由は、日本に 1 度も訪れずに、第 2 次世界大戦中、日本のリサーチのために米戦時情報局の命を受け、研究されたものだからである。このような状況下で為されたものにも関わらず、「文化相対主義」の立場で偏見がほぼ無く書かれたものである

[15] 端信行『流動化する日本の「文化」—グローバル時代の自己認識』、「2-1 グローバル時代の地域文化」（日本経済評論社、2001 年）136 ページ

ことが評価されている[16]。ルース・ベネディクトによる「日本文化論」とは、日本人が日本人であることを根拠づける「アイデンティティ」の「拠り所」を指すと考えられる[17]。
本書の主な論点は、以下の 2 つである。これらは、欧米文化における「個人主義」と「罪の文化」の比較対象として指摘している。本書の出版後、多くの研究者により幾つもの議論が出現したが、そのどれもが『菊と刀』の論点をベースとしていると考えられている。

「集団主義」:「各人が自分にふさわしい位置を占める」という意識と行為が、日本の社会関係の基本にあり、それが日本人の階層制度に対する信頼からきており、人間相互間の関係および人間と国家との関係について日本人のいだいている観念全体の基礎をなしていると指摘する。それが、上下関係を中核として世代と性別と年齢の特権的関係によって、家族関係を底部におく社会・人間関係を形成する。この関係枠組における上下の協調は、重大な責務を委託された人間として行動する目上の者と、それに従う目下の者との結びつきであって、独裁的な権力者対従属者という形はとらない[18]。

と青木はベネディクトの解釈を説明している。「恩」と「義理」、「誠実」と「自重」という観念により「集団主義」は成り立つとされ、どこにポジショニングされているかということよりも、ポジショニングがあるかということが重要である。すなわち、自分の立場が確立されていることに人は安心感を覚えるのである。

「恥の文化」:「集団主義」が「個人主義」の対比として比較されるように、「恥の文化」も「罪の文化」の対比として比較される。その内の「恥の文化」、つまり「「悪い行い」が『世人の前に露顕』しない限り、思いわずらう必要[19]」がなく、「世間」の前での「恥」が人の行動の標準であるような社会」に日本は属していれるとされ、「日本文化」として捉えられている。

ベネディクトによると、「集団主義」と「恥の文化」は、非常に密接に結びついているとし、「集団主義」の特徴の根拠が「恥の文化」を尊重することにあるとされている。

2.2 「否定特殊性の認識」(1945～1955)

この時代、「先進モデル追従の、自らの文化の否定と劣性の認識に求められ、それからの脱出[20]」が説かれた。主に坂口安吾の『堕落論』、きだみのるの「気違い部落周遊紀行」の 2 人によってである。第 2 次世界大戦敗戦により、屈辱的な思いをした国民たちは、欧米をモデルに仕立て上げた。近代化＝民主化を掲げ、日本の「特殊性」を否定的に捉え、そこから脱出することを日本社会の共通認識としたのである。この時代を「否定特殊性の認識」と呼ぶ。この時代を代表するのは、以下の批判的分析で

[16] 青木保、前掲書、35 ページ
[17] 同上、47 ページ
[18] 同上、51-52 ページ
[19] 同上、54 ページ
[20] 同上、67 ページ

ある。

「家族的原理」: ベネディクトの「集団主義」と重なる部分が多いとみられている。法社会学者の川島武宜によると、「日本社会の家族的構成」という『長をとり、短をすてる』というような「家族的原理」は、民主主義の原理と対立していると述べている。「家族的原理」の主要的特徴は以下の 4 つであり、これら集団における体制と個人における精神の課題を克服すること、つまりベネディクトの「集団主義」と「恥の文化」を捨てることで近代国家の仲間入りができると説いた。

①「権威」による支配と、権威への無条件的服従。
②個人的行動の欠如とそれに由来するところの個人的責任感の欠如。
③一切の自主的な批判・反省を許さぬという社会規範。「ことあげ」することを禁ずる社会規範。
④親分子分的結合の家族的雰囲気と、その外に対する敵対的意識との対立。「セクショナリズム」。[21]

2.3　「歴史的相対性の認識」(1956～1963)

戦後の混乱がおさまり、経済状況も上を向き始めた頃である。戦前、戦後に西欧の文化が組み込まれ、もはや日本の文化は純粋さに欠けるが、独自に近代化を迎えた一国としてそれらに対して積極的な意味を見出し、先進国に肩を並べていると考える、所謂「平行進化」を謳い始めた時代を「歴史的相対性の認識」と呼ぶ。日本の西欧化ではなく、独自の発達路線を持つという視点は、まさに、敗戦日本の「自信回復」である。また、この視点は日本内部だけでなく、外部の日本に対する評価も高かったといえる。1955 年を境に以下のような代表的研究をもって、日本文化論に新しい見方が加わった。外部の著作も含む以下の 3 つである。

「日本文化の雑種性」: 日本の政治や教育現場など、西洋文化が生活の深い部分にまで浸透した所謂「和洋折衷」の暮らしが日常にある。加藤周一は日本文化が純粋でないことを悲観するのではなく、この「雑種性」をどう活かしていくかを考え、日本の在り方、進化の可能性を肯定する。対西欧で考えられている[22]。

「文明の生態史観序説」: 梅棹忠夫は、東洋と西洋という従来の分類基準に対して、近代国家とそうでないものに分類する新しい手法を提案した。高度な近代文明の日本と西洋は同じ達成度にあるとし、「平行進化」を主張し、日本の文明を積極的に肯定したものとなっている。対中央アジアで考えられている[23]。

『日本近代化と宗教倫理』: アメリカの社会学者ロバート・ベラーにより、1956 年に出版され

[21] 同上、63 ページ
[22] 同上、69-74 ページ
[23] 同上、75-78 ページ

た著書である。ベラーは、日本特有の武士階級と産業化の関係から、「強固な政治体系と支配的な政治価値は、明らかに、産業社会の勃興に適していた[24]」と指摘した。

2.4　「肯定的特殊性の認識」(1964～1983)

1964 年から 1976 年までを前期とし、1977 年から 1983 年までを後期とする。高度経済成長後、政治経済が安定化し、人々の暮らしも豊かになったため、「日本文化論」もさらに変化を遂げたが、日本の高度成長に、早くに注目したとされる経営学者のアベグレンと尾高邦雄による議論が新しい流れを作ったとされている。「歴史相対性の認識」の時代を経て、他国との比較により十分な近代国家だと自覚した日本は、さらなる経済大国としての自信を「日本文化論」に求めることとなる。この 20 年の代表的な「日本文化論」は以下の通りである。

「日本的社会構造の発見」: 1964 年に社会学者の中根千枝によって発表されたものであり、対インドで考えられている。「集団主義」の原理を解明し、それが人間関係の「タテ性」によるものとし、また、自分の持つ「資格」よりも「場」を重要視すると発表した。また、このような「タテ」的な人間の共同体関係は、日本人の中に脈々と受け継がれているものであり、これが日本人の「批判精神」、「論理性」の欠如を助長している点を批判した[25]。

「恥の文化再考」: 作田啓一により、ルース・ベネディクトの「恥の文化」に対する再考が為された。「恥」には、「公恥」と「羞恥」の 2 種類存在し、ベネディクトの考える恥は前者であるのに対し、作田は後者の意味を付加した。この「恥」の再考と中根千枝の「集団主義」を合わせて、特殊な「日本文化」を肯定的に位置づけた[26]。

『文明としてのイエ社会』: 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎による共同研究である。またもベネディクトの「集団主義」と「恥の文化」が研究のベースとなるが、木村敏や濱口の「間人主義」という言葉を用いて、われわれは「集団主義」ではなく「間柄主義」であると主張する。「近代化＝産業化」を日本が達成できた理由として、人々が「イエ型組織原則」に則り、企業体などの「中間集団」において柔軟に適応したことが挙げられる、というものが本著の大きな論点である。しかし、日本型「集団主義」の在り方は多様であり、定義を固定できないものとして、定義を固めない。それは、70 年代以降に欧米諸国以上の発展を遂げるという可能性を予見するところからきており、「集団主義」と「近代化＝産業化」が両立するだけでなく、今後はより優位に働く可能性さえあるとしているからである。これを筆者たちは、「純粋に個人主義的でもなく純粋に集団主義的でもないある種の複合型」と呼んでいる[27]。

『ジャパン・アズ・ナンバーワン』: ヴォ―ゲルによるこの研究は、日本の発展の「成功」を紐解

---

[24] 同上、81 ページ
[25] 同上、93-95 ページ
[26] 同上、97-100 ページ
[27] 同上、122-126 ページ

くものとして、ベネディクトよりもより明確な「日本社会論」として書かれている。これはアメリカ人のために書かれたものであったが、日本人が「日本とは何か」を考えるための参考書として大いに受け入れられたという。日本の制度がアメリカにとっての「鏡」となる点を 4 つ紹介している[28]。

2.5　「特殊から普遍へ」(1984～1990 年頃)

「終身雇用・年功序列・人の和の尊重[29]」など、「日本的経営」に関する議論が、尾高邦雄によって為された。メリット、デメリットの両方を抱えながらも、日本一と評され図に乗ったことで、態度と行動の逸脱に結び付いたことに対して、特に国外で批判的な意見が増える。「日本的経営」は「日本文化論」とも深く結びつき、併せて批判の的となる。

チャルマーズ・ジョンソンやピーター・デールによる、適格な指摘は一部あるものの、一方的で、偏っているとも捉えられる。ハルミ・ベフは、「相手次第でゆれ動く「日本文化論」」という指摘には真実味があるとしている。彼女の指摘通り、「肯定的特殊性の認識」としての「日本文化論」は 80 年代に停滞期に入った。その後、「国際化」論議が盛んにされるようになり、その中発表された、山崎正和の『日本文化の世界史的実験』において、今までの常識を超え、「日本文化」、「日本的特性」を調整していかねばならないとする必要性を説いた。このような時代の流れから、青木は、「日本が世界の中で大きな位置を占めてゆくに従って、「日本文化論」は開かれた普遍性を求めるよりも、特殊日本の肯定へ閉じられた方向へ向かう[30]」、と分析する。

2.6　「国際化」の中の「日本文化論」(1989 年、1990 年以降)

1989 年のベルリン崩壊の年、2 つの「日本論」が発表された。1 つは、ウォルフレンの『日本権力の謎』であり、もう 1 つは、ジャーナリストのジェームズ・ファローズの「日本封じ込め」である。この時代、「肯定的特殊性の認識」の時代に示された「独自性」が否定的にみられるようになった。

そして、著者は 1990 年以降の「日本文化論」の在り方についての考察を加える。

2.7　「おわりに」—いま求められること

青木保自身、海外での仕事経験や外国人留学生とするなかで、「日本文化とは何か」、「日本人のアイデンティティはどこにあるのか」と意識することが多かったと語る。また、異文化の環境下では「自文化」の独自性を主張したくなる一方で、「自己卑下」に陥ることもあると認める。そしてその一方で、これらに論理的根拠はなく、「感情的」な性質を持つとし、「自文化中心主義」、「自民族中心主義」、「異文化・異民族排斥主義」、「人種差別」などを含む政治に与える影響を危惧している。

ドイツの作家トーマス・マンがナチス・ドイツの崩壊後に「ドイツとドイツ人」という講演を行った。彼はドイツの「陰鬱」な歴史と向き合ううえで、負の部分を否定し、なかったものとするのではなく、良い部分も悪い部分を含めることが本質であると考え、「結局は人間であること一般の悲劇性の範

[28] 同上、129-130
[29] 同上、134 ページ
[30] 同上、160 ページ

例にほかならない[31]」と、青木はトーマス・マンの言葉を引用する。そして最後に、こう訴える。

「「日本文化論」にとって今求められることは、トーマス・マンがここに痛切に訴える「ドイツの不幸」に示される「特殊性」と「普遍性」をまさに「日本および日本人」の問題としても世界に提示することである。このような国際的に呼びかける「声」を広島と長崎の後でもてなかったことこそ、「われわれ」の不幸のように思える。マンの言葉は、「統一」へ向かうドイツの現在にとっても大きな意味をもつものにちがいないであろう[32]。」

3　先行研究②—『問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに』

1990年代のアメリカでは、人種差別が大きな社会問題とされた。単に偏見や個人的な問題ではなく、不平等な社会構造の穴として問題を見つめ直すべく法学や哲学、社会学や心理学など様々な学問分野の研究対象として取り扱われ、研究が急速に発展していった[33]。白人性研究は、これまでの人類の歴史で人種関係の中心に位置づけられてきたがために問題視されず、見過ごされてきた白人というカテゴリーがどのように社会的に構築され、いかに機能しているのかについての解明をめざし[34]、エスニシティに対して真の意味での平等な視点を身につけるという社会的目的を持つ。また白人性の研究者であり『白人とは何か？ ホワイトネス・スタディーズ入門』の著者である藤川隆男は、「白人研究は、多様な見方を尊重し、見えない構造的な差異の形成と権力支配に対抗するためにある[35]」と白人性研究の意義を説いている。

その藤川によると白人性とは、「空虚な概念であり、その境界は他社の不完全性によって定義される[36]」という。例えば、19 世紀半ばのアメリカでは、白人性と黒人性が境界線となっていたために、白人側の集団への加入を目指したアイルランド系移民は、黒人性を否定することで加入を果たしたとされている。ここからわかるように、「身体的特徴」が白人性を定義するのではなく、その時代のその社会環境によって変容するものであるということは覚えておきたい。藤川によると、こうした特徴を持つ白人性は以下の 2 種類に分類できるという。しかし①の白人性の根拠として②が存在するため、②であるだけでは完全な白人性を獲得することはできないという[37]。

① 「白人の身体を指向する特殊な白人性[38]」である。所謂外見のことを指し、白人であることを根拠づける皮膚や髪、目の色などの特徴を持っていること。

---

31 青木保、同掲書、188-189 ページ
32 同上、189 ページ
33 松尾知明『多民族化社会・日本—<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』、「第 8 章 問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに」（明石書店、2010 年）192 ページ
34 同上
35 藤川隆男『白人とは何か？　ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房、2005 年）13 ページ
36 同上、30 ページ
37 同上、30-31 ページ
38 同上

② 「白人の身体を離れ、人類の標準を指向する白人性[39]」である。白人文化における基準が人類にとっての標準・基準であるとし、あらゆる民族や人種が白人性の取得が可能であるということ。

この白人性研究をベースに、松尾は「日本人性」という概念を設定し、以下の 4 つの特徴とそれらが孕む問題点を挙げている。日本人であることの社会的意味を学校教育の観点から考察し、「日本人性とは何か」が明らかにされている。

① 「日本人性とは、国内外の他社との差異のシステムのなかで社会的に構築されたもので、「外国人(非日本人)」ではないことによって定義される[40]。」
これにより、自分と相手という正対するする存在を創り上げることによって、日本人という安心できる立場を確立してしまうということが起こる。

② 「日本人性は、日本人が自分や他社や社会をみる視点となっている[41]。」
これにより、日本人＝○○だという固定観念が自分たちの中に無意識的に構築され、多様な声を自ら切り捨ててしまうということが起こる。

③ 「日本人性は、無徴化された(unmarked)不可視な(invisible)文化を形成する[42]。」
そもそも、日本人であるということは、不可視であり、実体がない曖昧なものであるが、社会にとっての普遍的なものとして認識されることにより、それが日本社会においての当たり前となってしまう。

④ 「日本人性は、日本社会において構造的な特権をもつことを意味する[43]。」
これは、日本人＞外国人という不等式が成り立ってしまうことを意味する。こうして、日本社会における、日本人ではないマイノリティが「知らず知らずのうちに、…就労、居住、医療、教育、福祉などにおいて大きな格差[44]」の被害者となってしまうのである。

4 今日語られる「日本人らしさ」

本論文の冒頭部分(はじめに)で、現代社会における「日本人性」の存在の有無について触れたが、実際に衰退していくものなのだろうか。多文化主義国家のオーストラリアの多文化主義論争を題材に、「白人性」に関してはどう考えられているのか、藤川隆男の紹介する文化人類学者のガッサン・ハージの議論は以下の通りである。

多文化主義と言っても、そこにある各々の NESB 国民[45]のエスニック文化は、白人多文化主義者のイメージに合わせた安全な文化であり、「多文化祭」で展示されるようなものに過ぎない。オースト

---

39 同上
40 松尾知明、同掲書、193 ページ
41 同上
42 同上、194 ページ
43 同上
44 同上、195 ページ
45 NESB 国民とは、「広義には非英語系ヨーロッパ系移住者とその子孫を含むが、狭義にはアジア系の移住者とその子孫を指す」と 210 ページにおいて定義されている。

ラリアは、NESB のたくさんの文化が陳列された動物園に過ぎない。そして、飾られている文化は今を生きている NESB 国民の「生きている文化」ではなく、白人多文化主義者が思い描く固定的で本質化された「死んだ伝統文化」である。その点で白人多文化主義者も国民国家の統治的・管理的主体であることに変わりない。…現行の多文化主義「政策」ではなく現在の多文化共生の「現実」を素直に認め、白人幻想を捨て、多文化な現実に白人が同化する必要がある。これこそ…「ディープな多文化主義」である[46]。

以上のように、ガッサン・ハージは、多文化主義をうたうことで白人の支配的地位を保持する「ナショナリスト」の存在を批判視している。進んだ多文化主義国家とされているオーストラリアにおいても未だ「白人性」という幻想による他民族・多人種の否定が行われているといえる。
またマスメディアの存在が「白人性」を助長しているという。藤川の紹介するブッシュらの研究によると、メディアにおいて描かれているアフリカ系アメリカ人は、真の彼ら・彼女らの姿ではなく、白人のイメージを纏っているに過ぎない、つまり「白人性を身につける[47]」状態であるとしている。「白人・白人性研究でしばしば指摘されるように、身体性を越えた白人性が構築されるプロセスに、メディア産業をめぐる経済構造と政治性が立ち現れている[48]。」

これまでの「白人性」における議論と同様、「日本人性」も不平等な社会構造を生み出す様々な問題を孕んでいる。事実として正しい一面があることも否定は出来ないが、多くの場合は都合よく用いられていて、特にマスメディアにとっては受け手の注目を集める上で便利なテーマとして使用される。こうして、「日本人らしさ」の幻想が創り上げられる。

5　サッカー日本代表の変遷—「日本人らしさ」の視点から

「日本人らしさ」は日常生活の中で無意識的に語られるが、姿形ない曖昧なものである。これを、サッカー日本代表の変遷を通して、「日本サッカー論」として可能な限り可視化を試みたい。そして、サッカー日本代表と「日本人らしさ」との繋がりがどう変化していくかを分析する上で、歴代の日本代表監督を 1 つの切り口としたい。全体指揮を執る監督という存在は、選手と同等かそれ以上にチームにとって重要な存在であると言っても過言ではない。選手 1 人ひとりが最高のパフォーマンスをできて初めて、チームとして機能することを考えると、選手を活かすか殺すか、監督の技量により勝敗が決まる。記憶に新しい岡田武史監督やその他、代々の日本人監督はどう捉え、指導してきたのか。また、日本サッカー界では、1992 年を境に、多くの外国人監督が日本代表監督に就任し、大きく影響を与えてきた。彼らは、ほぼ初めて日本人選手たちに向き合う中で何を心がけたのか。日本サッカーは、年々飛躍的に成長を遂げているとされ、FIFA の世界ランキングでも上位 50 か国に食い込んでいる。実際、この成長に監督の「日本人らしさ」への向き合い方は関係しているのだろうか。

また、監督の在り方に私たち外部の人間が触れる際、マスメディアが仲介者という役割を果たす。歴

---

46 藤川隆男、前掲書、212-213 ページ
47 同上、201 ページ
48 同上

代監督の言葉や戦術など、チームに対する監督の思いが表れる部分に注目し、時代順に分析していく[49]が、これらの言葉は私たち視聴者もしくは読者が親しみやすいよう、マスメディアによって置き換えられたものだということを心に留めなくてはならない。

5.1　『勝利のチームマネジメント』から見る日本代表監督によるチームの創り方

本書籍は組織づくり、リーダー人材育成のプロで、コンサルタントの松村卓朗によって書かれている。時代を超え、日本における科学技術や生活水準が向上してきたことと同様、サッカーそれ自身やそれを取り巻く環境も大きく変化した。求められる選手像や流行の戦術スタイル、監督のタイプやメディアの在り方など、さまざまである。本節では、サッカー界における「日本人らしさ」について述べる前に、日本社会に潜む数々の問題がサッカーに与えてきた影響とそれに対してその時代の代表監督が向き合ってきたかについて書かれている『勝利のチームマネジメント』を軸に、その他の書籍からも引用しながら振り返る。そしてそれにより日本サッカーがどう変化を遂げてきたのかを確認する。

5.1.1 ハンス・オフト(1992.5-1993.10)

ハンス・オフトは日本代表監督史上初めての外国人監督だ。「プロの指導にはプロを[50]」と起用された。82、83 年とヤマハ発動機の臨時コーチを務め、天皇杯優勝などに貢献、84 年から 4 年間はマツダのコーチ、監督として、日本リーグの 1 部昇格、天皇杯準優勝などの実績を残した[51]。そんなオフトが取り組んだのは「チーム作り」である。理由は、オフト監督就任当時は J リーグ発足前でもあり、未だチームにはアマチュア選手が多かったのである。ちょうど「選手のプロ化[52]」が進んでいた頃だった。オフトは「チーム作り」にあたって、「“目標”を共有する」、「“役割分担”を徹底する」、「強固な“人間関係”を構築する[53]」という 3 つの要素を重要視し、「チームに属するメンバー1 人ひとりの能力の総和[54]」ではなく、「相乗効果が生まれている状態[55]」を目指した。また、「コンセプト」を用いることで、監督の言葉を選手全員が同じイメージを持って明確に理解できることを目指した。結果としては、「ドーハの悲劇」の時に指揮を執った監督として語り継がれる通り、W杯出場は叶わなかったものの、「それまでで最強の日本代表をつくりあげた[56]」とされた。また、「日本代表チームが「○○(監督の名前)ジャパンと呼ばれるようになったのは、オフト監督以降だ。それはすなわち、日本代表が、代表に選ばれた選手の集まりというだけの意味ではなく、「チーム」としてどの程度機能するかにも大きく関心が集まるようになった証[57]」だと筆者の松岡卓郎は述べている。

---

[49] 短期間且つ当時監督代行として指揮を執った、パウロ・ロベルト・ファルカン、山本昌邦、大木武、原博実は割愛する。
[50] 日刊スポーツ新聞社＋飛鳥新社編集部『サッカー日本代表新聞　W 杯への栄光と挫折の 50 年闘争史』（飛鳥新社、2006）42 ページ
[51] 同上、42 ページ
[52] 松村卓朗 『勝利のチームマネジメント　サッカー日本代表監督から学ぶ組織開発・人材開発』（竹書房、2014 年）22 ページ
[53] 同上、24 ページ
[54] 同上、39 ページ
[55] 同上、24 ページ
[56] 同上、21 ページ
[57] 同上、40 ページ

5.1.2 加茂周(1995.1-1997.10)

加茂周はオフト監督後、僅か 8 か月で解任となったパウロ・ロベルト・ファルカンの後任として就任した。彼は当時もっとも実績のある日本人監督とされていて、「日本人でなければコミュニケーションがとれない」という理由で推薦されたのだった。そんな加茂周が導入したゾーンプレスというモダンな戦術は「組織で戦う」[58]ということ、つまり組織として「一人ひとりが自立的に動き判断を重ねながらも、それでいて全体が有機的に連動する[59]」ということである。このような組織は、「自律分散型フラット組織」と呼ばれ、「ファシリテーター型」と呼ばれる「メンバー間の相互作用のプロセスをリードし、協働を効果的に促したり、協働を支援したりして、チームの力を最大限に引き出す[60]」タイプのリーダーが求められる。日本サッカー協会内で加茂監督の人事を巡って意見の食い違いが起き、W 杯予選の途中で解任されることとなり、結果を出すことはできなかった[61]と言われているが、当時の新聞を振り返ると日本サッカーの歴史に残る重要な瞬間が多くある。例えば、1996 年 3 月 25 日は「川口　夢五輪!!」という見出しに、28 年ぶりの本大会出場決定の瞬間を喜び号泣する川口の写真が一面に大々的に掲載されている[62]。

5.1.3 岡田武史(1997.10-1998.6)

加茂監督の後任として引き継いだのは、加茂監督のもとでコーチを務めていた岡田武史である。監督経験のないコーチが、突然チームの監督として指揮を執ることとなりチームは不安に包まれたという。しかし、コーチとして近かった選手との距離感を離す[63]など、「考え抜く[64]」ということをした上で監督としての覚悟を持って多くの決断をし、決めごとを取り入れた。特に徹底したのは以下の 3 つ[65]である。

① 練習で常に 100%の力を出し切ること
② ミーティング中は私語を慎むこと
③ 自分の荷物は自分で持つこと

岡田監督就任中の 1997 年 11 月 17 日、奇跡が報じられた。サッカー日本代表のW杯初出場が決まり、特報版で「ジョホールバルの歓喜」について 2 面に渡り大きく報じられた[66]。別の紙面では、「英雄岡田」という見出しが付けられ、日本中の歓喜の様子が垣間見える[67]。

---

58 同上、47 ページ
59 同上、50 ページ
60 同上、49-52 ページ
61 同上、61 ページ
62 日刊スポーツ新聞社＋飛鳥新社編集部『サッカー日本代表新聞　W 杯への栄光と挫折の 50 年闘争史』（飛鳥新社、2006 年）62 ページ
63 松村卓朗、前掲書、69 ページ
64 同上、72 ページ
65 同上、70 ページ
66 同上、86-87 ページ
67 同上、88 ページ

5.1.4 フィリップ・トルシエ(1998.10-2002.6)

1996 年 6 月 1 日の紙面を振り返ると、「日韓W杯」という大きな見出しが付けられ、2002 年のサッカーW杯は日本と韓国の共同開催であることが決まったことを報じている[68]。この大会に向け、日本代表監督に就任が決まったのが、フィリップ・トルシエである。本書で彼は「エキセントリック[69]」と呼ばれ、発言や振る舞いの度に注目を集めていたトルシエ監督だが、ただサッカーを教えるだけでなく、真の意味で日本のサッカーを強くするため、日本社会の根幹から変えようと尽力してくれたと言われている。そんな彼が「日本代表チームにもたらした重要なものは、「異文化」を通じた意識変革であり、「原則」を貫くグローバルスタンダードともいえる厳格な姿勢[70]」だった。「異文化」に触れる体験を与えることで日本の常識は世界の常識ではないことに気づかせ、自分の立場を見直すきっかけを与えた。また、「規律や原理原則、あるいは公平性[71]」といったグローバルスタンダードを肌で知ることができるよう、練習中やメンバー選抜のときだけでなく普段の生活においてもチームの規律を守るよう選手たちに要求した。

ここで言われる規律とは、秩序の中での規律ではなく、戦術的規律のことを指す。2008 年、FC 琉球の監督を務めていたトルシエに、日本代表監督時代のことを振り返ってもらった。その中で日本代表の課題について次のように語った。戦術的規律とは、「状況に応じて選手が何をどうすべきかを理解していること。適切な瞬間に的確なポジションをとり、的確なプレーができることで、ヨーロッパにはそれぞれのサッカー文化に呼応した戦術的規律がある[72]。」

また、「日本社会の根幹から変えようと尽力してくれた」と上述したが、日本独特のマスコミの存在にも言葉を残している。これは非常に珍しいことである。日本のマスコミは、スポーツ選手であろうと芸能人であろうと関係なく、過度に報道することがあり、それはフランスであれば人権問題やプライバシーの問題として訴えられることもあるというレベルだとトルシエは非難している[73]。フランスなど、スポーツが一つの文化として認められている地域においては、客観的かつ専門的に論じられるそうだ[74]。こういった部分から、日本におけるスポーツまたはサッカーの歴史の浅さが見て取れる。

5.1.5 ジーコ(2002.7-2006.6)

ジーコ監督以降のチーム戦術は、トルシエ監督時代のそれとはとても対照的だった。ジーコ監督は、「自由」をテーマに掲げて日本代表の指揮を執ったのである[75]。この「自由」は、選手だけに限らず、日本人にとっての大きな課題であると松本は言及している。「私たちは、「自由」ということに慣れていない[76]。」またサッカーは教わるものではなく、遊びながら身に付くものだとして、日本の学校の授業の一環として習うサッカーでは、「自由」やアイデアのある面白いプレーヤーが生まれにくいことを指

---

68 日刊スポーツ新聞社、前掲書、54 ページ
69 松村卓朗、前掲書、98 ページ
70 同上、108 ページ
71 同上、105 ページ
72 Sports Graphic Number 715 号（文藝春秋、2008）59 ページ
73 松村卓朗、前掲書、107 ページ
74 同上
75 同上、121 ページ
76 同上、124 ページ

摘している[77]。そうして日本で育った選手に欠ける「自由」を補おうとしたのではないだろうか。

それと同時に、「プロ意識」を植え付けることに注力した[78]。「練習で出来ないことは試合で出来ない」や「練習で成功を積み重ねることで、試合での成功率が高まる」といった表現はスポーツでは良く聞く表現であるが、これをジーコは日本代表チームに求めることで、プロ意識を高めようと常に意識していたという。

> ジーコ監督が日本人に求めたのは、自主性・主体性の発揮だ。そして何より、自由を謳歌すること。それは、同時に責任や覚悟を伴うものであり、プロフェッショナル意識を醸成するものだ。しかし、それだからこそこんなに楽しいものはない、それがサッカーの本質だ…ジーコが目指したサッカーは、日本人の私たちに進化の方向性を与え、日本人がつくるチームが目指し、いつかは到達しなければならない頂を示していたように感じる[79]。

こうした話の中で筆者が思い出すのは、最強のチームとして世界中に名を馳せているスペインのチーム、FC バルセロナ(以下バルサ)である。バルサは独自のメソッドにより組織を強固なものとしている。バルセロナが強いのは、スーパースターとも言える選手が集まっているからではない。監督と選手だけでなく、チームに携わる運営や地域の人々も含め一丸となって、下部組織(カンテラ)から支えているからであり、幼い頃からプロ意識が芽生えている。元バルサカンテラ監督のジョアン・サルバンスは、バルサのカンテラ選手たちはたとえ 15 歳でもクラブを代表して伝統のユニフォームを着ることの意味を理解しているという。サッカーをやっている子どもであれば、誰もが羨む環境であること、その中でもメンバーに選ばれチームを代表することの意味をしっかりとわかっているのだという[80]。こうした環境で育ちプロフェッショナルとしての意識が備わることで、単なるサッカーの上手い選手になるのではなく、人としても優れたサッカー選手へと成長する。

5.1.6 イビチャ・オシム(2006.8-2007.11)

イビチャ・オシムは、「日本は、特異な文化を持っている国に思えた。優雅で美しく、人々は温かいホスピタリティを持っている。そして、サッカー選手は機敏に良く動き、勤勉だった。私はこの国に深い感銘を受けた[81]」と日本を高く評価する。

彼は、現役引退後、ヨーロッパで監督としての実績を多く残し、その後訪日する。2003 年に J リーグチームの監督に就任し、2006 年には日本代表監督を務めた半ば、病に倒れ、約 1 年で監督の座を退くこととなった、サッカー日本代表元監督である。彼がチームに導入したのは「哲学」であった。この哲学とは「自分自身が依って立つ考え方[82]」のことであり、自分の向かうべき方向性が分からなくなっ

---

77 同上、124-127 ページ
78 同上、117 ページ
79 同上、130 ページ
80 ジョアン・サルバンス『史上最強のバルセロナ　世界最高の育成メソッド』（小学館、2009 年）32 ページ
81 イビチャ・オシム『考えよ！ —なぜ日本人はリスクを冒さないのか？』（角川書店、2010 年）4 ページ
82 松村卓朗、前掲書、138 ページ

たとき、困難に立ち向かうときに自分を支える軸となるもののことである。彼自身は「リスクを負うこと[83]」を「哲学」としており、オシム語録と呼ばれる彼の名言は彼がこれまで歩んできた人生から生まれたものだろう。

「私が一番最初にやらなければならないことは、日本代表を“日本化”させることだ[84]」、「自分たちのよさを客観的に見直し、よく知ることが日本代表チームの“日本化”の第一歩」と、外国人であるオシム監督だからこそ見える日本人の長所を十分に活かしたサッカーをすると語った。そんな彼が目指したのが「人もボールも動くサッカー」であり、日本人の持つ協調性、敏捷性、献身性、個人技術を長所であるとして評価した故である[85]。また、彼はそれまでの日本代表のサッカーは模倣に過ぎないとして、「自分の頭で考える」ことの大切さを説いた[86]。オシム監督は次のように語った。「とりわけ日本人選手には、“いつ、どうやって反応するか”が欠けている。なぜなら、長期にわたってほとんど自分の頭で考えることなく、むしろ監督の頭に頼って育ってきたからだ[87]。」それでは結局のところ、「日本人らしさ」の「～らしさ」はサッカーにおいてどういうことなのか、松村が「スタイル」という言葉を用いて説明している。

> 代表チームのさまざまな経験の蓄積を通じて、得意なことはさらに磨きをかけながら、不得意なことを克服しながら、集合知として蓄積され、DNA のように脈々と受け継がれていく。それはサッカーの競技者だけで形成されるものではなく、その国の観戦者の眼を養い、肥えさせていくスパイラルと相俟って、長い歴史と文化の上に築かれていく。それが、スタイルというものであろう。日本のスタイルとは何か。まだまだ自分たち自身でも認識できていないと思う。だから、当然世界にも分かりやすい形で伝わっていない。サッカーが発展途上にあるということは、スタイルの模索と構築の途上でもあるということだ[88]。

「日本人らしさ」が足かせとなり、日本のサッカーの成長を留めている部分があるとして、オシム監督が何度か言及している文言が幾つか見受けられる。「日本人らしさ」がどう日本代表チームのスタイルとして影響を与えているのか。雑誌 Number では 2008 年、2010 年の 2 回に渡り、インタビューが行われた。その中で、「日本人」について言及してあるものを抜粋する。

① 「日本人は、いつも謙遜していて、何かの後ろに隠れているように本音を表には出さない。何を考えているのかをなかなか言わない。それはサッカーにおいては決して美学ではない[89]。」

② 「日本人はディシプリン(規律)があると思い込んでいたし、今も思っているが、私にはそこが大きな疑問だった。たしかに君たちは、礼儀正しいし目上の者の言葉に従順だ。だがそれは、サッカー

---

83 同上、139 ページ
84 Sports Graphic Number 715 号（文藝春秋、2008）63 ページ
85 松村卓朗、前掲書、142 ページ
86 同上、144 ページ
87 同上、145 ページ
88 同上、148 ページ
89 イビチャ・オシム、前掲書、91 ページ

で求められる戦術的ディシプリンとはまったく別のものだ。状況に応じて瞬時に判断し、的確に動く。それが戦術的ディシプリンであり、ビッグクラブとごく平均的なクラブ、トップレベルとそうでない選手の違いを作り出しているのは、戦術的ディシプリンのみと言ってもいい[90]。」

③ 「最初の顔合わせのときに、たくさんの人たちがやってきたのには驚いた。しかも彼らは、上司の話を聞くだけで、黙ってそこにいる。何のためにいるのか、なぜこれほど従属的なのか、私には理解できなかった。日本人は常に誰かに導かれたがっている。だがサッカーで大事なのは自分で決めて、自分で責任を負うことだ。しかもコレクティブに、チームのことを考えながら[91]」

④ 「上司に向かって、どうしてですか？と尋ねるのが、はばかられる傾向にある。上司もあえて説明しようとはしない。日本のシステムはそうで、日本人は子どものころからそういう環境で育っている。上意下達が重んじられる社会で、自分の想像力を働かせることは難しい[92]」

⑤ 「第三者—われわれ外国人の語る日本人論を君たちは好むが、いったい何のためなのか。そこをまずよく考える。そのうえで、自分自身をオープンにしていく。外側の世界とコミュニケーションを取り、理解するために。そうすれば進むべき道は、自ずと見えてくるだろう」
「自分を知ることで、自分を変える[93]。」

5.2 岡田武史(2008.1-2010.6)

オシム監督が脳梗塞で倒れ、後任の日本代表監督として再度声がかかり、2 期目がスタートする。チームは 2010 年のW杯南アフリカ大会直前までまとまらず、結果を出せずにいたことでサポーターから不安と不信の声が上がっていた。しかし、いざ大会が始まってみるとチームとしてのまとまりを一気に見せ、ベスト 16 という結果をチームとして残すことができた。

そんな岡田監督が 2 度目の代表監督で取り組んだのは、「個としても組織として強くなる」ということだった。これまでは、日本人の個の技術や能力は外国の選手に比べて劣るとして、チームで戦うという戦術が当然のことのようにとられてきた。しかし結局のところ、個の力を伸ばさないと、今後の日本サッカーの未来はないとして、この時こうした戦略が取られたのだ。具体的には、「チームのために」ではなく、「誰かのためになんて思うな、「俺のチーム」と思え[94]」というメッセージを送ったという。

さらに、「究極のエンジョイというのは、自分の責任でリスクを冒すということだ[95]」と考え、選手にリスクを冒してチャレンジすることを求めている。「監督がやれ、と言うことは従順にやるが、言われたことしかやらない。…日本人を指導する上で、最大のチャレンジだった…この傾向が日本人は外国人よりちょっと多い[96]。」として、日本人監督である岡田監督も、他の外国人監督同様、日本人選手

---

90 Sports Graphic Number 768 号（文藝春秋、2010）42 ページ
91 同上
92 同上
93 同上、45 ページ
94 松村卓朗、前掲書、161 ページ
95 同上、168 ページ
96 同上

の消極的な性格の課題を注視していたからだ。

リスクを伴った真のエンジョイなんて、スポーツではなく部活で育った私たち日本人にもっとも欠けているのかもしれない。…あるいはチャレンジを促すことを推奨して、逆にリスクを冒す楽しみを本人から奪ってしまっていることがあるのではないか。「日本人を指導する」ということに携わる者は、こうした難しくも挑戦しがいのあるハンドリングが求められる[97]

5.3　アルベルト・ザッケローニ(2010.10-2014.6)

南アフリカ W 杯後、新監督として指名されたザッケローニは、98 年、99 年シーズンに AC ミランをセリエ A で優勝させた経歴を持ち、他にもユベントスや今現在長友が所属していることで知られているインテルを率いたこともある有名監督である。彼はチームや選手以外からも日本文化を学ぼうと、代表選後も帰国せずに留まったと言われている[98]。ザッケローニ監督は、「コミュニケーションの人[99]」と呼ばれているという。「思考の壁」つまり、自分と相手の間に理解の差が生まれないよう、自分から歩み寄り、確認を徹底するのだ[100]。彼は相手の分析よりも自分のチーム内での理解度にギャップがないかということをとても重視していたのである。また言葉だけでなく、選手を「見ること」にもコミュニケーションの肝と考えていたようで、選手の立場としても「見られている」と感じることで緊張感や集中力が高まるという良い影響がある[101]。さらに「シチュエーショナル・リーダーシップ」、つまり選手の成熟度によってコミュニケーションの仕方を変える手法も取っていたという[102]。

来日して 3 か月、ザッケローニの初のインタビューがスポーツ雑誌「Number」によって為された。以下では、記事の中で、彼が考える日本人の特徴や気質に対する発言の部分を抜粋し紹介する。

① 「日本人は責任感が強いため、自分のミスでまわりに迷惑をかけることを恐れる傾向がある。「上がれ」と言われても、そう簡単には実行できない。だが、「うしろを気にするな」と責任を取ってもらえれば、リスクを冒して前に出ていくこともできる[103]。」

② 「日本の選手たちは、自分自身よりも、グループを大切にする姿勢を持っている。チームへの帰属意識がとても強いんだ。これはサッカーという団体競技を行ううえで、大きなアドバンテージだと考えている[104]。」

③ 「イタリア人というのは、自分のためになると思ったら、それを実行する。一方、日本人選手は、

---

97 同上、170 ページ
98 Sports Graphic Number 768 号、前掲書、18 ページ
99 松村卓朗、前掲書、178 ページ
100 同上、179 ページ
101 同上、181 ページ
102 同上、183 ページ
103 Sports Graphic Number 768 号、前掲書、18 ページ
104 同上

組織のためになると思ったら真剣に取り組む。だから、同じコンセプトを伝えるにしても、強調すべき点を変えなければならない[105]。」

④　「ご都合主義のイタリア人からも、大いに見習うべき点があるとザッケローニは言う。」…「それは、「ルールを破る」ことの巧みさだ。」…「日本に来て最も感銘を受けたのは、礼儀正しさや他者への尊敬だ。他社を思いやることは、ピッチ内でも役立つことだと思う。しかし、サッカーにおいては、あえてグループのルールを破らなければいけないときがある。試合で何かを変えるには、個人のファンタシア(想像力)が必要なんだ。」…「日本人はとてもクリーンなプレーをする。自分たちがやることに対して、相手もおつきあいしてくれるサッカーだ[106]。」

⑤　「…マリーシアだよ。テクニック的に劣るマリーシアからも、学ぶことはある。だから日本の選手は、狡猾な相手との対戦をもっと増やす必要がある[107]。」

⑥　「日本代表では、日本にいる選手たちの特長を生かすやり方を探していきたい[108]。」

6.　結論

以上から、サッカー日本代表がチームとして「日本人らしさ」を意識することとなったのはフィリップ・トルシエ監督以降であると言えるのではないかと、筆者は考える。それ以前のチームに求められたのは、W杯や五輪、アジアカップなどの世界レベルでの大会に出場をするための、世界基準に通用するいわば最低限の技術やチームの在り方だった。しかしトルシエ監督就任以降、日本代表は比較的安定して世界で互角に戦うことができるレベルにまで進化した。連続で五輪出場は勿論のこと、決勝トーナメント進出を叶えたことや日本人選手が次々と海外クラブチームに移籍をするなど、それまで日本と世界の間にあった壁が徐々に崩れていることを実感させるような出来事が起こるようになった。特に最近では、「エゴ」と「規律」、「攻撃」と「守備」といった、「1 人 2 役」の働きができるところなど、日本人のチームにおける人間性が評価を受け、日本だけでなく海外で活躍する所謂、欧州組の選手たちが増えた[109]。斯くして、日本代表は世界とレベルの比較が出来る程になったのだ。まさに、グローバルスタンダードの仲間入りができたようだった。

トルシエ監督は、世界/グローバルスタンダードとの比較の上で日本を客観的に見ることを教えた。ジーコ監督は、「自由」にプレーするという、日本人にとっては比較的未知でありながら、グローバルスタンダードでもある概念を日本に取り込み、課題解決を試みた。また、欧州や南米に比べサッカー文化が浸透していない日本に対して、サッカー選手としてプロフェッショナルであることの意味を教えた。岡田監督は、ジーコ監督に似ている部分が多いが、「自由」をより具体的手法に落とし込み、日本人の性格に合った「自由」を教えた。その後、海外組と国内組、ベテランと若手など、選手が多様化したチームを指導する上で、ザッケローニ監督はチーム全員で一つの戦術を掲げるのではなく、云わば、

---

105 同上、19 ページ
106 同上
107 同上
108 同上、20 ページ
109 週刊東洋経済 6386 号（東洋経済新報社、2012）78 ページ

選手１人ひとりにカスタマイズされた方法をとることで、チームをまとめた。

こうした監督たちが日本代表に適した戦術を執ることを「日本化」という言葉に上手く落とし込んだのがイビチャ・オシム監督である。それは監督の指導法だけに限らず、サッカーファンの在り方やマスメディアにおいても日本独自のスタイルを持つこと大切さを、結果としてサッカーに触れたことのない人にも理解できるように発信したのである。

こうしてみると、サッカーにおける「日本人らしさ」の追求は、今後の日本代表にとっても非常に大切な要素であると考えられる。しかしサッカー日本代表を取り巻く環境において課題はまだまだ多い。トルシエ監督の節でも既述の通り、メディアもその一つである。スポーツジャーナリストの永井洋一によると、メディアの「監視」としての重要な役割を忘れてはならないという[110]。「メディアで繰り広げられる多種多様な言説による健全な監視によって、日本のサッカーが育てられる[111]」と考え、「大切なことは、視点を定め、多角的に情報を収集し、自らのスタンスを崩すことなく、継続して情報を発信していくこと[112]」だと述べる。こうして日本のメディアがいかにそういった役割を果たしていないか、また内容も感情ベースの表面的なものかを説明し、今後の報道の発展の必要性を説いている。また、第4章までで論じたように、「日本人らしさ」は「日本人らしくない」モノの排除を助長することを忘れてはならない。サッカー日本代表を取り巻く環境が「日本人らしさ」に向けて統一されることでナショナリズムが高まり、「日本人らしさ」に必要のないものは排除される恐れがあるからだ。2015年3月、Jリーグ・ディビジョン1、浦和対鳥栖の試合が行われた日のこと、「Japanese Only」の横断幕が掲げられた。フェアプレイの精神に反するこうした行為が起こりかねないのである。「日本人らしさ」がもたらす二側面の影響をマスメディアに踊らされることなく、国民一人ひとりが考え、理解していかなくてはならない。国境を越え人々が行きかう現代においては、急務である。

---

[110]永井洋一『日本のサッカーはなぜシュートが決まらないのか！？　ベスト8飛躍の課題と現実』（合同出版、2010年）166ページ

[111] 同上

[112] 同上、167ページ

【引用・参考文献】
青木保『「日本文化論」の変容　戦後日本の文化とアイデンティティー』、中央公論新社、2005 年
アルベルト・ザッケローニ『ザッケローニの哲学』、PHP 研究所、2011 年
イビチャ・オシム『考えよ！ —なぜ日本人はリスクを冒さないのか？』、角川書店、2010 年
イビチャ・オシム『信じよ！ —日本が世界一になるために必要なこと』、角川書店、2014 年
岩崎久美子編、相良憲昭『在外日本人のナショナル・アイデンティティ—国際化社会における「個」とは何か—』、明石書店、2007 年
ジョアン・サルバンス『史上最強バルセロナ　世界最高の育成メソッド』、小学館、2009 年
祖父江孝男『文化人類学入門』、中央公論新社、2006 年
永井洋一『日本のサッカーはなぜシュートが決まらないのか！？　ベスト 8 飛躍の課題と現実』、合同出版、2010 年
日刊スポーツ新聞社＋飛鳥新社編集部『サッカー日本代表新聞　W 杯への栄光と挫折の 50 年闘争史』、飛鳥新社、2006 年
端信行『流動化する日本の「文化」—グローバル時代の自己認識』、「2-1 グローバル時代の地域文化」、日本経済評論社、2001 年
藤川隆男『白人とは何か？　ホワイトネス・スタディーズ入門』、刀水書房、2005 年
松尾知明『多民族化社会・日本—<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』、「第 8 章 問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに」明石書店、2010 年
松村卓朗 『勝利のチームマネジメント　サッカー日本代表監督から学ぶ組織開発・人材開発』、株式会社竹書房、2014 年
馬渕仁『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』、京都大学学術出版会、2002 年
馬渕仁『クリティーク多文化、異文化—文化の捉え方を超克する』、東信堂、2010 年
南博『日本人論 —明治から今日まで』、岩波書店、2006 年
山岸俊男『日本の「安心」はなぜ消えたのか』、集英社インターナショナル、2008 年

【論文】
宮本翔大「「日本文化論」からの脱却—マスメディア分析を通して」、慶應義塾大学法学部塩原良和研究会卒業論文、2010 年

【雑誌】
週刊東洋経済 6386 号、東洋経済新報社、2012 年 4 月 14 日発刊
Sports Graphic Number 715 号、文藝春秋、2008 年 11 月 13 日発刊
Sports Graphic Number 768 号、文藝春秋、2010 年 12 月 23 日発刊